私の幼児教育論（一）

――保育実践に対する研究のかかわり――

小川博久

はじめに

教育研究者にとって「教育論」という用語に「私の」という言葉をかぶせ、その表題で文章を書くことは、大変勇気のいることである。というのは、私の書いたものが「教育論」とよぶに値いするかどうか、はたして「理論」とよべるほどの構成がなされているかどうかがまず問われるからである。さらに「私の」という言葉の重みにふさわしいオリジナリティ（独自性）をもっているかどうかが自問されなければならないからである。私にはここでそうした「論」を提出する力量はまだない。しかし、編集者から提供されたこの執筆の機会を私の自己表出のためにぜひ生かしたいと思い、私の研究方法論を語ることでこの表題の内容としたい。研究というものは、以下のべる意味で「虚業」であると私は思う。ここで「虚業」とは虚構をつくりあげることを自分の任務とする仕事であるということである。この虚業性への自覚こそ「実業」としての保育実践に研究が寄与する道であると私は考える。

「保育実践を遠く離れて」

右の小見出しは、昔みたオムニバス・ドキュメンタリー映画「ベトナムを遠く離れて」の私流のパロディである。この映画で大変印象的だったのは、あの有名なヌーベル・バーグの巨匠、ジャン・リック・ゴダールの作品である。他の映像作家（監督）がベトナム戦争の戦火の中に飛び込んで、生々しい記録を送ってきたのに、ゴダールはパリの郊外の丘の上で、映画スタッフとカメラを回している場面しか撮らなかったのである。最初これを見た人はふざけていると考えたに相違ない。他の作品が各々ベトナムの悲惨にして残酷な現状を克明に訴えているのに、ゴダールのそれは、あまりにのんびりと怠惰にさえみえる映画屋の姿だったからである。

しかし、よく考えてみると、ゴダールのこの姿勢こそむしろ厳しい自己凝視ではなかったか。ヨーロッパのカメラマン（映像作家）達が、ベトナムの戦場を命を賭して駆けめぐり、戦争の生々しい実態を伝えたことは、たしかに貴重なことである。しかし、かれらは、自分の国土を戦火に晒し、肉身や友人の死に遭遇したベトナムの人ではない。平和で何事もないかのように思われるヨーロッパから来た観察者にすぎない。ここはベトナムではない。平和なヨーロッパなのだ。そうゴダールはいいたかったのではないか。

また、カメラマン達が取材中、死と背中合わせの体験をしたとしても、かれらが伝えるものは、従って観客が受け取るものは、スクリーンに映された虚像にすぎない。それは、かれらの体験そのものではない。虚像として構成されたものである。「私は一介の映画屋にすぎない。私の仕事はその虚像をつくることなのだ」とゴダールはいいたいのではないか。もしそうだとすれば、ゴダールの主張は一見、映画をつくる仕事を否定し、映像（虚像）に価値をおいていないかのようにみえる。しかし、私はそうは思わない。ゴダールの一見、自己否定のように思われる姿勢は、つぎのような自己への問いかけなのである。映画をつくるという仕事はどういう仕事か、それはどうあらねばならぬか。映画をつくることによってなにができ、なにができないか。映画をつくることによって、現実（戦火のベトナムと平和なフランス）にどのようにかかわりうるか。事実、その後、かれは自分の作品において、映画をつくるからくりを暴いてみせてくれる（たとえば、「彼女について知っている二三の事柄」）また、観察者（映画製作者）であることが、同時に、時代状況への参加者たりうるかを、カメ

ラ・アングルの設定のしかたの問題として追求している。（例「男性・女性」）。たとえば、男と女の会話で、画面の左か右の端に対話者の一人を映し、画面の外の対話者のもう一人と会話させる。画面につねに一人しかうつらない。これは、監督であるゴダールがどこに視線（カメラ・アイ）を投げ、観察者として現実をどう切り取っているかを観客に意識させるという手法である。（詳しくは、皐月一「私の映像ノート（II）―ゴダールをめぐって―、死寝魔十二月号六～八頁参照）

私が保育を観察し、時に保育について文章を書くとき、私はこのゴダールの態度から学ぶものが多い。まず私は保育者でもなく、幼児でもない。私は保育の観察者にすぎない。私が提出したのは、保育で実際におこったこと（保育の事態とよぼう）ではなく、保育について書かれた文章にすぎない。それは、文字という記号によって表わされたものでしかない。だからこの文章を書くという営みはゴダール流にいえば、さしずめ「保育実践を遠く離れて」ということになるだろう。

また、かりに私が保育者であって、自分の保育について文章を書く場合でも、私の体験がそのまま文章の内容であるということはない。保育について記述するという行為は書き手としての自分を保育者としての自分から分離しなければできることではない。書き手である自分が体験者である自分（保育者）と改めて捉えなおすのである。これが体験を記述するということである。体験を捉えなおすということ、体験について書くということは、体験を一定の視点からみなおすということである。保育の体験を記述するとき、書き手は体験者である自分がもたない目的をもっている。保育体験者はなぜ自分の保育体験を記述するのか。それは保育の事態の中で、特に感動したこと、特に問題だと思ったこと、自分の注意をひいたことなど、第三者に伝えたいときに書くのである。それゆえ、書き手が文章として構成したものは、書き手の視点に基づいて一定の目的のもとにとらえなおされたものであって、保育の事態そのものでもなければ、保育者の体験そのものでもないのである。

さらに、文として構成されるということは、言葉という記号で伝えられることしか伝えられないという点に注目する必要がある。なぜなら、それは保育の体験や保育の事態と、保育についての記述を区別する一つの重要な目やすだからである。たとえば、幼児が「すごいな！」と云うのを保育者が見聞したとしよう。保育者はこの発言に注目し、それを自分のメモ帳に、A男「すごいな！」と表現したとしよう。保育者ならば、A男がこの発言をしたときの目の輝き、息づかい、身振り、発話の音の強弱などを思

い出すことができる。またなぜそういったのか、その発言にどのような意味があるのかもわかっている。しかし、その保育を見ていない読者がこのメモ帳の「すごいな！」という表記を見ても、保育者がその表記について抱くのと共通なイメージを抱くことはできない。この発言の際のA男の目の輝きとか表情などはこの表記からはわからない。このことは、「すごいな！」というA男の発言をめぐる状況全体から書き手が「すごいな！」という形で表記されるものだけを抽出したのだから、当然といえば当然である。つまり、保育について記述するという行為それ自体、文字記号であらわせるもの、伝達されるものだけを選択し、他の文字記号化されないものは無視するという決定をおこなうことなのである。このことは、記述内容を増加し、詳細にしていくことによっても原理的に解決されない。たしかに、A男の例の発言の際の表情、身振り、環境などを書き加えることによって、その時の状況をイメージ化しやすくはなるだろう。しかし、どこまで記述すればその状況を正確に記述しえたかという問いには答えがない。なぜなら、記述するという行為は前述のように文字記号で伝達しうるものを選択する行為であり、この選択の仕方は記述が増加するにつれて無限になるからである。たとえば、「目は輝いていた」と記述すれば、つぎはどんなふうに輝いていたか、それに対し、「キラキラ輝いていた」と記述すれば、「キラキラ」とはどういうことかというようにどこまでもはてしがないのである。ということは、記述したものは、それがいかに生き生きとした、あるいは正確な描写だとしても、それは状況そのものではない、あくまでもそれはつくりもの（フィクション）だということである。だからこそ、当事者は第三者に向って、A男の状況はことばでいっても伝わらないなどというのである。そしてそんなとき、写真とかテレビカメラなどが伝達手段として考えられよう。しかし、これらも、現実の状況に代るものではない。それらも文字記号とはちがった形で、状況についての選択をともなうのである。

一般に保育者の保育記録には記述を虚構と考える意識はない。A男が「すごいな！」と発言した状況に居合わせた保育者にとってみれば、メモ帳にA男「すごいな！」というと書くだけで、その時の状況やそこでの事情が想起される。自分のメモ帳に書くかぎり、それはそれで批判されるべきではない。しかし、その状況に居合わせない読者にその状況を伝えようとするには、読者が解釈可能な形で、「すごいな！」発言をめぐる状況について再構成しなければならないことに気がつかない保育者が多い。このことは批判さるべきである。

保育の研究においては、虚構を作ることが自己の課題であると

いう認識は増々要求される。なぜなら、研究という仕事は、保育について語る、記述するというレベルにとどまることはできないからである。保育について記述されたものをデーターとして、それについて考えるという仕事である。そしてこの「考える」という活動は言葉を使うことによっておこなう。だから研究は記述されたもの（構成されたもの）についての記号操作（再構成）ということになる。私が研究を「保育実践を遠く離れた」仕事であるともじったゆえんがここにある。研究とは虚業つまり虚構をつくる仕事なのである。しかし、私は虚業という言葉を否定的に使ってはいない。むしろ逆に、そのことへの自覚が研究を実りあるものにし、保育実践に寄与しうるのだと考えている。

実業としての保育実践と虚業としての研究

小説を書くにしろ、評論や研究論文を執筆するにしろ、文章を書くことを業とする職業を私は虚業だと考えている。虚業というのは、既にのべたように、虚構（フィクション）を構成する仕事という意味である。これに対し、保育実践、臨床上の行為などを実業とよびたい。両者を区別する基準はそこでおこなわれる言語活動にある。

実業の場合の言語活動は働きかける者とそれを受ける者（たとえば、保育者と幼児）の関係を成立させている「場」（対話の参加者の意志伝達を全体として一定の方向に導いたり、円滑化したりする作用であって、これは対話にともない、参加者各自の感情の緩和の上に成立する雰囲気であると定義しておく）に規定される。そしてこの場は作用者、被作用者の相互の役割についての相互認知、両者の空間距離、それ以外の物的・人的条件（集団か、対話だけか等）、空間を共有している時間の長さ等によって規定される。したがって保育者が幼児に「……しようね」といった言語活動の意味はその時々の場によって異なる。言表の上では同じでも、幼児に与える影響も、そうした言語活動への教育的評価も、同じではないのである。

一方、文章を書くという言語活動において言表の意味を規定するのは、文の構成とそこに含まれる語彙の意味、それの複合である文脈（書き手の伝達ないし、表現目的を実現するための文章の構成を定義しておく）である。この文脈のつくり方には、当然のことながら書き手の生活体験が影響を与えている。しかしこの影響は、直接、文字記号に表現されるということはない。いいかえれば、文を構成するには、言葉の意味論的規定（各々の語はなにをさし示し、あるいは含意するかについて言語使用者に共通に承

認されている常識）や構文論的規則（文を構成するさいに従うべき規則）に従わなければならない。だから、体験は伝達可能な文に構成されなければならない。ただし、それが伝達可能、つまり読解可能であれば、どのような語彙を選ぶか、どのような文をつくり、それをどう連ねるかは書き手の自由である。書き手が自分の体験を伝えようとするとき、どのように書き出し、どのような筋で文を並べるかの自由を書き手はもっている。このように、書くという行為は、どういう文脈で文章を構成するかについては、多くの自由をもっているが、語彙の選択、文の構成に関しては厳しく拘束される。でなければ意味は正確に相手に伝わらない。書き手は自分の伝達目的を明確に表現できるような文脈を構想し、文構成上の規則に厳しく従うことによって文章を書かなければならない。この点は、後述するように、対話の場における言語活動と著しい相違をなしている。

書くという言語活動が右のような特質をもつということを読者との関係でいえば、書き手は読み手に直接拘束されずに、自己完結的に文脈を設定する権限をもつということを意味している。文章が活字になるとき、活字になるものには普通、署名、文責者名が入る。新聞雑誌の無署名記事は編集者名が署名、文責者名に相当する。これは書き手が自分の提出した文脈に対し責任をもつことを意味する。うらがえしていえば読者には責任はないということである。だから、書き手の提出した文脈を読者がどう解釈し、どう評価しようと読者の勝手である。書き手は自分の意に反した解釈や評価を受けても、これを封ずる権限はない。自分の言わんとする趣旨はこうだとわざわざ解説し、弁明文を書くことはできる。しかしそれによって、最初の自分の文章への一般的解釈傾向を変更することができなければ、その文章への評価を書き手は甘受せざるをえない。

このように、文章を書くことによって自分の意図を伝えようとする仕事は、自分の自由裁量で文脈を決定できるかわりに、一度投げ出されたものは、フィードバックがきかない。文章を書く過程には読者のフィードバックがないので、書き手は、「頭の中」で仮空に読み手の意識を想定するしかない。研究が虚業であるというのも、書くという活動にその要因が見いだされるのである。

（つづく）

（東京学芸大学）

＊　＊